

ラジオ放送
＜令和4年4月～6月放送分＞

ON AIR



金光教の声

No.439

もくじ ~ contents

<先生のおはなし>

 金光教の先生のお話です。

- もうひとつの誕生日（私からのメッセージ） *page 1*
大阪府・金岡教会 岩本威知朗
- どうぞ、私をお育てください（信心ライブ） *page 5*
- ボク、偉いのねえ（ピックアップ） -病気になるって- *page 9*
富山県・中伏木教会 大代信治
- ふたたび輝いた宝石（ピックアップ） -病気になるって- *page 13*
京都府・田中教会 谷上正三
- 未来につながる経験 *page 18*
大阪府・韮教会 鍵山道隆
- 多度津の街角で（私からのメッセージ） *page 22*
香川県・多度津教会 玉城真紀子
- 人を責める心（ピックアップ） -人を責める- *page 26*
大阪府・天満教会 森田光照
- 戦闘は回避された（ピックアップ） -人を責める- *page 31*
大阪府・扇町教会 押木廣太
- 伯母のお供え物（もう一度聞きたいあの話） *page 35*
兵庫県・出石教会 大林誠

<こころの散歩道>

 軽い音楽に乗せたちょっといい話

- 自分も他人も知らない自分 *page 39*
- 我が家に、はるが来た！ *page 43*
- お世話になります *page 47*
- 肉そば *page 51*

《私からのメッセージ》

「もうひとつの誕生日」

大阪府・金岡教会

岩本威知朗

おはようございます。金光教金岡教会で奉仕しています、岩本威知朗です。50歳です。

皆さんは、誕生日をいつものように迎えていますか。家族や友人などからお祝いをしてもらったりする日でもありますよね。

金光教では、神様から授かったいのちの誕生日として感謝する日、と教えられています。私は今では、神様始めいろんな方々のおかげで誕生日を迎え、年を重ねてきていることを、だんだんありがたく思えるようになってきました。その事柄の一つとして、今日は娘の急病をとお

して、「もうひとつの誕生日」といったお話をしてみたいと思います。

今から10年前の3月のことでした。母方の祖父が亡くなって6年と、祖母が亡くなって25年の霊祭を、孫の私が、母の実家で仕えることになっていました。

その日のことなのですが、数日前から私の次女、当時2歳が、ウイルス性の腸炎で高熱が出て寝込んでいました。私が出かける時、泣きぐずっていたので、妻に、「気を付けといてな」とお願いして、神様にもお祈りして出かけました。

すると、向かっている途中で父から電話で、「次女がけいれんを起こして、救急車で病院に

運ばれたとの連絡が入り、びっくりしました。まさか救急車で運ばれるなんて想像もしていませんでした。このまま霊祭に行くか迷いましたが、私が病院に行っても何もできないので、心の中で神様をお願いしながら母の実家に向かいました。

あとからその時の様子を家族に聞きました。泣きぐずっていた娘が急に静かになり、妻が様子を見に行くと、ぐったりしていて意識ももうろうと。急いで教会のご神前に連れていくと、けいれんが起こる。すぐに父が、神様にお供えしたお神酒みきを、祈りながら娘の全身に吹きかけた。息も細くなっており、さらにお神酒をかけると、目に入ったのか痛がって意識を取り戻す。その間に妻は救急車を呼び、長男と長女は玄関

で救急車を待つ。そして、次女は妻に付き添われて病院に運ばれる。その後ご神前で、長男と長女は泣きながら「助かりますように」と必死にお祈りしてくれていたのです。

その時の私は、お祭りを仕えるにも、何とか神様御霊たま様に祝詞のりとを上げようとするんですが、心配で仕方がなく、詰まり詰まりになってしまふ。すると突然、「ここにはおらん」といった、声ならぬ言葉が胸に響いたんです。すぐに「祖母の御霊様が娘を助けに行ってくれたんだ」と感じて、なぜか「助かった」と思えました。すると、ありがたくてありがたくてしょうがなくなり、涙がぼろぼろとこぼれ落ちました。

霊祭のあと、妻から電話があり、病院で再び発作を起こしましたが、すぐに処置をしてもら

い、落ち着いたとのことでした。私はひと安心して、祖父母のご霊前にお礼を申し上げて、病院へ向かいました。娘はベッドで点滴をしながら、いつもの笑顔を見せてくれて、本当にホッとしました。その後1週間、病院の方々のお世話になり、元気に退院しました。

あの時、ちよつとでも容体の異変に気づくのが遅かったら、危なかつたかもしれませんでした。そして、家族みんなが次女が助かるようにと必死でした。

私は最初、娘が救急車で運ばれたと聞いて「何で霊祭の当日に」と思っていました。でもあとで思い直すと、その日は3月19日で、ちょうど祖父の月命日だったんです。さらに祖父の60年、祖母の25年という節目の霊祭の日起こったこ

とが、まさに神様が最善のご配慮を下さったんだと思えました。神様から、「先祖の御霊は、子どもや孫、ひ孫のことを、ずっと祈ってくれてるぞ」とのメッセージだと感じたのでした。

その時から3月19日を、次女の助かりの日と決めて、「もうひとつの誕生日」として、毎年親子で神様と御霊様にお礼のお祈りをするようになりました。今、次女は中学生になり、助かりの日から10歳の誕生日を迎えて、自分でお礼のお祈りをするように成長しています。

祖父は、40歳の若さで病気で亡くなりました。その時長女が9歳、私の母である次女が6歳、長男の末っ子が3歳と、幼い3人の子どもたちを残してでした。その後、祖母が女手一つで、金光教の信仰を支えに苦勞を乗り越え、子ども

たちを育てました。

最近気づいたんですが、10年前のこの時私は40歳で、祖父が亡くなった年と同じだったんです。さらに当時の祖父の子どもたちと、私の3人の子どもの年齢もほぼ同じでした。もし私が祖父の立場だったらと改めて考えさせられました。家族を残して後々のことを心配もし、どれほど残念だっただろうかと思ってきました。また方が一、次女が亡くなってたら、親の私はどうなったか分かりません。次女を助けてくださったことだけがありません。次女を助けてくださったことだけがあるがたいのではない、家族も一緒に助けてくださったんだと気づかされました。次女の助かりの日は、私にとっても「もう一つの誕生日」だったんです。

神様や御霊様は目には見えないですが、いつ

も私たちのことを見守り支えてくださったということや、親先祖からの尊いいのちの流れというものを、「もうひとつの誕生日」をとおして親子で確かめ合っています。家族みんなが元気に過ごせていることは、神様御霊様のおかげだと感謝しています。

皆さんも一度、先祖のご命日などに思いをはせてみると、改めて大切な日だと気づけるのではないのでしょうか。ひよっとしたら、「もうひとつの誕生日」を、見つけることができるかもしれないですね。

《信心ライブ》

「どうぞ、私をお育てください」

おはようございます。今日は、京都府・金光教墨染教会、松岡光一さんが、2021年10月に、天満教会でお話しされたものをお聞きいただけます。

松岡さんは、金光教本部に勤めていた時、全国から集まる経験豊富な先輩達に、祭典の作法を指導することになりました。若くて経験も浅かった松岡さんは、任せられた役割にプレッシャーを感じ、とても苦しみました。募る不安や心配、そして不満の気持ち、どのように克服して、元気な心になっていったのか、お話しになりました。

どうぞ、無事に御用が務まりますようにと、足りないところは足してくださいと、お広前でお願いをしました。でも、いくらお願いしても、お祭りを迎えるたびに緊張しますし、御用のことを思うと、しんどくなります。

もっと言うと、「なんで自分がやらなければいけないのか、あの人がやればいいのか」と、不満も出てきます。本当に助からない状態でした。神様に対しては、「どうぞうまくいきますように。失敗しませんように」と、そんなお願いばかりする自分でした。そういうことが重なっていくと、そういう自分ではだめだと思えました。これでは神様へのお礼を表すどころか、かえって神様に心配をかけている自分だと思いました。この気持ちを何とかしたい。でも、不

安な気持ちとかは、自分では全然どうにもできないですね。どうしたらいいのだろうかと考えながら、何回かそういうことを繰り返しておりました。

ある時、どういう心構えで御用させていたただいたらよいかなど思っていると、「神様と人間は親子の関係」だと教祖様が教えてくださっていることを思い出しました。神様は、人間を子どもと思って守ってください、生かしてください、っている。そう思った時に、じゃあ、親にとって、子どもがどうしてくれることがうれしいかな、と思えました。そしてふと、自分の子どものことを考え、子どもがどうしてくれることが、親の自分にとって、一番うれしいかなと考えた時に、子どもの成長する姿を見るのが、親は一

番うれしいなど、思いました。自転車が乗れるようになったとか、算数の九九が言えるようになったとか。そういう成長する姿を見ることが、親である自分は一番うれしいなと思ったんですね。そう思えた時に、自分の御用に向かう姿勢も、神様へのお礼として、神様に喜んでいただける御用にならせてもらうには、今、自分に与えられたこの御用をとおして、自分が成長させてもらうことが必要で、その姿を神様は喜んでくださるだろうなど、そう思えたんです。そういう気持ちになると、フワフワして心配ばかりしていた自分の気持ちが、しっくりして、腹が座るといふか。そうだ、自分がお育ていただくこととして、この御用に取り組ませてもらう。いろんな先生に質問されても、分からないこと

があるかもしれないから、もう一遍、祭式の勉強をしていこう。分からなかったら、そこでまた勉強して、先輩に尋ねて、分からせてもらおう。それで私が育ててもらえる。その姿を、神様は喜んでくださるだろうと思えると、気持ちがすごく楽になりました。自分が、嫌だなと思う御用をとおして、私に成長せよ、私に育っていきなさいと、神様は願ってくださいているんだなと思えるようになりました。そうになると、神様への向かい方が変わります。それまでの、どうぞ失敗しませんように、どうぞうまくいきますように、という願いから、どうぞ今日の御用をとおしてお育てください、という願い方に変わっていききました。

私たちが日々生活していく中では、いろんな

ことが起きてまいります。そういう時こそ神様に心を向けて、私の生命を生かそう生かそう、育てよう育てようと、働き通しに働き続けてくださって、どうか助かってくれよ、立ち行^いいてくれよと、願いをかけてくださっている神様の心に沿わせていただくことが、大事だと思えます。そしてまた、その苦しい中にあっても、そのことを自分の肥やしにしていく、肥やしにして取り込んでいく、受けきっていく。そして、自分自身が、その難儀なことを、苦しいこと、つらいことを肥やしにして、自分が一層、大きくお育ていただいていく。そういう気持ちで過ごしていくということが、大事じゃないかなと思います。

大変な経験も、自分を育てようと、神様が願いをかけてくださり、見守ってくださいっていると思えると、心細くなった気持ちも落ち着いて、乗り越えられたという体験記でした。

難儀なことがあると、ついつい悪いことばかりを考えて、心の元気がなくなってしまう。私は、毎日を元気に過ごす良い手がかりになるなど思いました。



《ピックアップ》テーマ…病気になって

「ボク、偉いのねえ」

富山県中伏木教会 なかふしき 大代信治 おおしろしんじ

(平成20年2月27日放送より)

十数年前、私たち夫婦に待望の長男を授かりました。ところが生まれてすぐ、息子の右目に軽い障害が見つかりました。病院の先生の話では、水晶体を摘出して、毎日欠かさず訓練すれば日常生活に不自由はないということでした。私たちは、神様に、「どうぞ、手術が成功しますように。そのあとの訓練に、親子一緒に取り組みますように」と、お願いしました。こうして、息子は、生後40日で、目の手術を受けたのでした。

すぐにコンタクトレンズを作ってもらい、退院後、訓練を始めました。起きている間は毎日コンタクトレンズを付けるようになりました。左右の視力が大きく違いますので、どうしてもよく見える左目ばかりを使います。ですから、右目の視力を上げていくために、よく見える左目を隠して訓練をしなくてはならなかったのです。

この訓練には、絆創膏ばんそうこうの大きくて丸いものを使います。それを、ベタツと左目に貼り付けて見えなくすることによって、右目を使うようにするというものでした。

はじめは、一日に1、2時間の訓練でしたが、起きている時間が長くなるにつれて、訓練の間も増えていき、保育園の頃には、一日に8時

間も訓練をするようになりました。ほとんど一日中、左目に絆創膏ばんそうこうを貼っているような感じですので、本人は大変嫌がりません。周りの人たちからは、「外してあげればいいのに」と、よく言われました。特に、入園式などの特別な日は、そうでした。私たちも、かわいそうでありませんが、「このまま右目がよく見えないうに」、と毎日毎日神様をお願いしながら、訓練を続けていきました。

幼い息子の小さな顔に大きな絆創膏ばんそうこうを貼り付けた姿には、痛ましいものがありました。一緒に外を歩いていますと、その姿を見て、皆さんびっくりした様子です。目を背ける人もありま

したし、「どうしたん、その目は？ 痛いのか大丈夫？」と、心配して尋ねてくださる人もありました。尋ねてくださった人には、決してごまかさずにありのままをちゃんと説明して、分かってもらおうと心がけておりました。相手に分かってもらいたいのと同時に、息子には引け目を感じずに堂々と訓練を続けてほしいと願っていたからです。

やがて、もうすぐ小学校という頃になりますと、息子自身が、簡単な説明をできるようになってきました。そんな息子を、私たちは頼もしく思っておりましたが、それでも息子は、いつもいつも同じ説明をすることが、面倒に感じることもあるようでした。

ある時、息子と一緒に歩いていましたら、女

の人が、声をかけてくださいました。息子は、「またか。嫌だなあ」という顔をしながら、それでも、いつものように、絆創膏ばんそうこうの理由を説明しました。すると、その女の人は、「かわいそうに。大変ねえ」と言ってくれたのです。しかし私は、思わず、「いいえ。この子も、毎日一生懸命頑張っているんですよ」と、口にしませんでした。私は何か親バカぶりを外へ出してしまつて恥ずかしいような思いでおりました。するとその人は、「あら。ボク、偉いのねえ」と、褒めてくださったのです。その時、私は、息子の顔を見て、ハツとしました。息子は、何ともうれしそうな、自慢げな顔をしていたのです。これには少々驚きました。息子にしてみれば、「かわいそうに」と気の毒がられるよりも、「頑

張っているんだね」と褒められるほうが、はるかにうれしいし、自信を持てるのです。相手の人も、同情するより、褒めて励ましたほうが、さすがにいい思いがするのではないのでしょうか。大事なところに気づかせてもらったなあと思ひ、心の中で、神様にお礼を申し上げました。あとから振り返つてみて、息子を褒めてくれた、あの言葉は、神様からのお言葉だったようにも思えるのです。

その女の人は、その後も、お会いするたびに、息子のことを褒めてくださいました。そのおかげもあつてか、息子は、だんだんと、引け目を感じずに、自分の目のことを説明できるようになつていったのでした。

いろんな出来事を乗り越えながら、訓練は、

小学校3年生になるまで続けました。「コンタクトレンズを付けた状態で、視力〇・一くらいになれば、いいほうだ」と言われていたのですが、息子の右目の視力は、一・〇まで上がりました。もう、左右の視力に、大きな差はなくなり、病院の先生も、「毎日、よく頑張ったね」と、褒めてくださいました。それは、そのまま、私たち家族の思いでもありました。

金光教には、「難はみかげ」という教えがあります。降りかかってくる不幸や災難が、あとで幸せにつながっていくような生き方があるのだ、ということではないかと思えます。息子は、今では中学生になり、左目に絆創膏ばんそうこうを貼った日々は、遠い昔のことになりましたが、あのつらかった経験は、決して無駄ではなかったと思う

のです。保育園から小学校にかけて、あの訓練を続けられたこと、しかも、それを、堂々と続けられたことは、息子のこれからの人生に、大きな糧となっていくに違いありません。自分と他人を比べて、劣等感を感じたり、人を見下したりせずに、互いに助け合い励まし合うことが大切であるということも、学んでくれたように思います。親である私たちも、本当にいろいろなことを学びました。

まさに、難がみかげになった、と思うのです。

《ピックアップ》テーマ…病気になって

「ふたたび輝いた宝石」

京都府田中教会 たなか 谷上正三 たにがみしょうぞう

(昭和63年10月12日放送より)

「先生、御無沙汰してます。勝手なお願いで
お参りに来るの、心苦しいんですけど…」

5年前の夏の夕暮れ、見るからにやつれた様
子のA婦人が見えました。

「本当に久しぶりですねえ、ようお参りでき
ましたなあ。どうしておられるやろう思うてま
した」

「実はね、私、勤めてる店の、乳癌がんの定期検
診にひっかかりまして、大病院で精密検査受
けましたら、先生、えらいことですね。お乳

一つ取らんなりませんねん。私、もう足から体
中ふるえてきて、立つてられしまへんねん。一
つ取つてもまた片一方に移つて、あっちこっち
飛んで、死んでしまうのどちがうか思うたら、
もう心配で心配で…」

そう話す彼女の声は上ずつて、青ざめた顔色
は、まさに病人の様相です。

私は、「大丈夫、心配いらしまへん。昔から、
教会の門くぐれたら、お願い事かなえられたん
と一緒に言います。今も、自分が来たのと違う、
神様が引つ張つてくれはったんです。なんぼ御
無沙汰しても、神様はいつもあんたが元気で
助かっていくように願うておられます。私も一
緒に、早いこと元の健康に戻れるようにお願い
させてもらいますから、安心して十分治療を受

けてください」と元気づけました。

この婦人は当時55歳で、ある時計宝飾店に長年勤めていました。彼女のお母さんは、今から10年前に亡くなりましたが、大変信心に熱心な方で、彼女もよく一緒にお参りしていました。が、自ら進んで神様にお願ひすることはありませんでした。人間は自分の努力次第で道が開けてゆくと確信して、今日までの人生を歩んできました。

しかし、健康な時はさほどにも思わない自分の体ですが、さて病気だ、手術だ、というところ、自分の全てが崩れてしまうのでしょうか。けれども、これからどうなるか分からない心配と不安の中で、彼女の生きたいという生命の叫びのようなものが、神様に心を向けさせたのでしょ

うか、「先生、人間てあきまへんねえ。ご存知のとおり、私、一人身どっしやる。そやさかいに、何が何でも体だけは氣い付けんなん、病気だけはしたらあかん思うてきましたのに。それから頼る人いうてあらしまへんし、持つものは持つてんなあかん思うてねえ。そやけど、あかんもんどすなあ。私、死ぬかもしれへん思うたら、さっぱり力抜けてしもうて。今朝からも、入院の準備しとかんならん思うて、身の回り整理してたんですけど、元気で帰ってこれるやろうか思うて、ふっと財布の中のお金見たら、何やお金が紙切れにしか見えしまへん。死んだらお金持つてもあきまへんしなあ。タンスの引き出し開けて、ちよつと持つてる宝石類眺めてましたら、みんな石ころとおんなじに見えてき

ますねん。今の私に何があっても、ないのと一緒やなあと、つくづく思いました。けど、今、先生に話聞いてもううて、神様にお願ひしてもろうて、なんや気持ち、が落ちついてきました」。彼女の心の中にあつた、どこへも持つて行きよるのない塊を、神様の前に出せたことで、顔色も次第に赤味を帯びてきました。

私は、今、彼女が心の安らぎを覚えると同時に、今日までわが力で生き、何事も自分以外に頼るものはないとして生きてきた姿を省みて、目に見えぬながら、大きな天地の中に神様の愛をその身一杯に受けていることを悟ってほしいと、ひたすら神様にお願ひいたしました。そして彼女に言いました。「Aさんあんたは、今も一人身やからどうのこうのと言うていましたけ

ど、ちがいます。あんたには神様がついておられます。また、たくさんの方がいつでも力になってくれはります。神様は『人間は皆、神の弟子』と教えておられます。『人と神様は親子』、人と人とは姉妹きょうだいです。そやから早う元気になるって、神様や人様のためにお役に立つて、共々に力を合わせて、楽しくゆう暮らせるようになってくださいなあ」と言いました。

「ほんと先生そうどすなあ。命あつてのことどすなあ。おっしゃるように、早うそうなりとおす」と、彼女もまた私の言うことに応えてくれました。その瞳は初めとは打って変わって輝いておりました。そして、これから病院へ行くと言ってタクシーに乗り込んだ彼女の後ろ姿に、神様が一緒について行ってくださったよう

に思いました。

入院後、手術のための手順も都合よく運び、心配していた病状も、手術の結果、後の憂いもなく、養生第一と診断され、本人は大変な喜びようでした。けれども反面、一つの乳房を切り落とした女性としての寂しさを、見舞いに行つた妻に切々と訴えたそうです。私は、その事だけでなく、生きている限り起こりくる様々な悩みや苦しみを、命あることの喜びによつて乗り越えて行けるよう、神様をお願い申しました。そのことを抜きにして、自らが助かることはもちろん、神様のお心もまた人の真実も理解できがたいでしょうし、さらに、神様のお役に立つ、人様のお役に立つことも、単なるうたい文句に終わってしまいます。

厳しい夏の暑さもようやく峠を越えた9月半ば、彼女は晴れて退院ができ、教会へ参つて来ました。その表情は、当初のそれとは雲泥の差で、喜びにあふれていました。

「先生ありがとうございます。おかげさまで助かりました。けれども、今しばらく養生第一と言われてます。それで、初め神様のお役に立つと申しましたが、当分できそうにありません。これからも入用がかさみますし、また、今持っているものは後々のために残しとかならんと思いますので、悪しからずご了承ください」と言われました。私は、「本当によろしおしたなあ。この上どうぞ、お大事にねえ」と言いつつ、まさに彼女の命と心が今よみがえ甦つたことを喜び、それによつて、彼女を取り巻く全ての

ものが生き返ったのだと思いました。紙切れとしか見えなかったお金が、その値打ちを表し、単なる石ころとしか見えなかった宝石は、今再び輝きを見せたのです。私は、彼女が真実、神様のお役に立つとは、生きる命の尊さとそこにある神様の愛を、喜びをもつて表してゆくものだ、ということを理解してくれるよう、祈り続けています。



《先生のおはなし》

「未来につながる経験」

大阪府 鞆^{うづぼ}教会

鍵山^{かぎやま}道隆^{みちたか}

おはようございます。案内役の大林^{おおばやし}誠^{まこと}です。
今日は、大阪市、金光教鞭教会の鍵山道隆さんのお話をお聞きいただきます。お子さんが不登校になった時の体験です。題して、「未来につながる経験」。

4年前の1月、当時中学1年生だった長男が、急に学校に行かなくなりました。前日は、友達と繁華街へ遊びに行っていたにもかかわらず、突然のことでした。学校へ行かない理由を尋ねても、「教室がうるさい」とか、「みんなに会

うのが嫌」「たくさんの方がいる所に行けない」など。聞きたびに変わり、本当のところはなぜなのか、よく分かりませんでした。

通学しなくなって数日は、朝から学校へ通わせるために説得を試みたり、部屋から引きずり出そうとするのですが、余計にかたくなになり、部屋に鍵をかけ、扉の内側に本棚や家具などでバリケードを築き、一日中部屋に閉じこもり、ご飯も食べない日が続くようになりました。

学校へ行かない理由が分からないので、嫌なことから逃げようとしているのではないか、自分の好き勝手にしたいのではないかと思ったり、何か嫌なことがあってつらい思いをしているのではないかと考えたり。または、子育てが間違っていたのではと自分を責める思いにもな

っていきました。日にちが経つにつれて、中学校にこのまま通わず、高校にも行けなかつたら将来どうなるのかという漠然とした不安な思いが、私の気持ちを焦らせていきました。

しかしそんな中でも、神様が、親である私に対して、信心するように促してくださっておられるのではないかと感じられました。人生において、身の上を起こることは、決して無駄事はないと自分の思いを変えて、毎日神様に「子どもが学校に通えますように。またこの経験が今後、大切な宝物となりますように」とお祈りしていました。

その祈りの中で思ったのは、こうして信心のご縁を頂いて、神様に心を向けさせていたいただくことができるのありがたいなあ。子どもがい

てくれるから、こうした心配や経験ができるのだなあ。これまで、ご飯を食べるのが当たり前、学校へ行くのが当たり前と思っていたことが、初めて当たり前でなかったことに気づき、これからは一つひとつできたことを喜び、お礼を申していく生き方にならせていただこう。何事も喜んで、お礼を申していこう。そういう心持ちにならせていただきました。

学校に通わなくなってから、3週間ほど経った頃、長男と話し合いました。食事は、規則正しく食べる、家族全員の行事には必ず参加するなど、ルールを守れば学校に通わなくても、家で何をしてもよいこととして、しばらくは様子を見ることにしました。長男も決まりを作ってから、安心して引きこもれるので、その

ルールを守ろうと朝もきちんと起きるようになっていきました。

結局、長男は中学1年の途中から中学2年の1学期の間も、全く学校に行くことはありませんでした。しかし、2学期から通いたい気持ちが芽生えたのか、週1回1時間だけ、教室以外の別室なら登校できるようになっていきました。親としては、「学校に行ってくれる」とホッと胸をなで下ろし、それだけでも本当にうれしい気持ちでいっぱいでした。

中学3年生の新学期が始まり、友達が迎えに来てくれたこともあってか、急に学校に通えるようになり、教室にも入れるようになりました。たまに休んだり、遅刻したりすることもありませんでしたが、長男は、通わなかったらまた行けなく

なるのではないかという危機感からか、続けて休むことはなくなりました。

長男は今でも、通学できなくなった理由は分からないと言います。ただ、通学できなかった時に発行された文集を読んで、こう話してくれました。

「文集には、いろんな1年間の行事の感想が書かれていて、その行事に参加できなかったことはすごく寂しく感じた。また中学2年で友達になれるはずだった人と出会えなかったことも、すごく残念に思った。でもこの経験をしたことで、これからはたくさんの人と話がしたい、人との出会いを大切にしたいと思う気持ちになった」と話していました。

今では、高校に入学し、1日も欠席すること

なく通学しており、大学受験に向けて勉強に取り組んでいます。

これまでの学校に通えなかった経験は、長男のこれからの人生にとって、大切なことを神様から気づかせてくださったように思っています。

いかがでしたか。

不登校は悪いことではないんだから責めてはいけない、無理強いしてもいけない、ということをよく聞きますが、実際の場面で、親として適切な行動ができるかどうか。これは本当に難しいだろうと思いますね。鍵山さんも最初は戸惑ったと正直に話しておられます。でも、神様のお心を尋ねるような祈りの中から、自分が改

まらねばという思いが生まれ、さらに、この子がいてくれればこそとお礼を言う心持ちにまんなったという。これは神様を信じる心があつてこそ、できたことではないでしょうか。信心には、あらゆる経験を未来にしっかりとつないでくれる心強い働きがあるということを、このお話は教えてくれています。

《私からのメッセージ》

「多度津の街角で」

香川県・多度津教会

玉城真紀子

おはようございます。

香川県金光教多度津教会の玉城真紀子と申します。

結婚を機に、九州の熊本から四国の香川に來まして、もう30年が経ちました。ラーメン好きから、うどんが好きになっております。

年月が経ちますとご近所の方とも仲良くなり、なじみになってよくお話しさせていただき
ます。

朝、教会の前を掃いておりますと、通りかかる方とあいさつを交わします。

「おはようございます」「行ってらっしゃい」
「親しい方だと「何ができよんな」と声をかけられたり。」

この言葉は何を作っているのか聞いているのではなくて、香川の方言のあいさつの言葉で、「最近どう過ごしている？」と相手に愛着を持つて尋ねる言葉です。

こう聞かれると、「なんちゃ変わりやせんよ」。そうすると、「いつも元気やのう」などと言葉を交わします。自然と笑顔で過ごせる日々のあいさつを、ありがたいなあと思います。

3月の半ばでしたか、こんなうれしい事があつたんです。歩いて買い物に行く途中、一人暮らしのご近所のおばあさんとお会いしました。

その方は、90歳近い方ですが、家の前を掃き掃

除しておられました。

私が、「お元気ですか？　いつもきれいにさ
れていきますね」と声をかけますと、おばあさん
が、「もうすぐ、隣の山本さんの男の子が、お
母さんと幼稚園から帰ってくるの。元気よく『お
ばあちゃん、ただいま』と、あいさつしてくれ
るからうれしゅうてな。私の息子たちは遠くに
いるから、私にとっては、ひ孫くらいの子ども
だけど、元気をもらっとるんよー」と笑顔で答
えてくれました。

山本さんは、おばあさんの隣に住んでおられ
ます。3人の男の子がおられて、皆さんとても
優しく、明るいご家族です。

おばあさんは、男の子のかわいい笑顔と元気
なあいさつがうれしくて、朝は男の子の明るい

声で「行ってきます」。おばあさんは優しく

「いつてらっしゃい」。帰りは「おかえり」、「た
だいま」と声をかけ合います。

時には、男の子が幼稚園のいろいろな出来事
や、採った虫の話を聞かせてくれたり、帰り道
で拾った石を見せてくれたりすることを、とて
もうれしそうに、おばあさんは私に教えてくだ
さいました。

そんな話をしていきましたら、山本さん親子が
帰ってきました。

男の子が「おばあちゃん、ただいま」といつ
ものようにあいさつをし、おばあさんも「おか
えり」と笑顔で応え、近くにいた私にも「おば
あちゃん、ただいま」と、男の子は声をかけてく
れました。男の子の輝くような笑顔に触れ、私

も思わず笑顔になり、うれしく思いました。

するとおもむろに、男の子のお母さんがおばあさんに向かつて、丁寧にお辞儀をされました。

そして、このようにおばあさんに言われたのです。「今日は幼稚園の学年末の修了式でした。

今年1年間無事に終えさせていただきました。

毎日声をかけていただいたおかげで、私も息子も、1年間元気に通園できました。ありがとうございます。

「お礼申し上げます」と、そんなふうに言うんです。山本さんは日々のお礼に加え、おばあさんへ1年間のお礼をおっしゃられて、私は「なんて素敵なお方なのだろう」と感動しました。

おばあさんは思いがけない言葉に戸惑って、「いやいや」と手を振りながら、それ以上言葉

が出ないようでした。男の子は明るい笑顔で、

「おばあちゃん、またね。ありがとうございます」と声をかけ、男の子のお母さんはもう一度振り向き、

丁寧なお辞儀をされました。そして、隣の自宅に帰っていかれました。おばあさんと私は、思

わず顔を見合わせ、自然と笑顔になりました。

おばあさんは私に、「笑顔が見たくて声をかけてたのに、思いもよらんかったわ。お礼を言

われるなんて、ありがとうございます。なんて、なんてうれしいんやろうなあ。とてもうれしい。

こんなありがたいと言われるなら、元気で抱かないけんとう」と話をしてくださり、会った

時よりもさらに元気な顔になっておられました。そして隣の家に向かつて手を合わせ、拝ん

でいるおばあさんの姿がありました。

おばあさんの拝む姿を見て、私はとてもうれしくて、飛び上がりたいくらいのありがたい気持ちになりました。おばあさんにしてみれば、自分がしたことで相手からこんなにも喜ばれて、言葉にならないありがたいさを感じて、山本さん家族を拝まずにはいられない気持ちになりましたのだと思います。

おばあさんに、1年間の心からのお礼をされる山本さん、そんな山本さんに出会えてとてもうれしい私でしたが、さらにそれを受けて、山本さんに向かって後ろ姿を拝まれるおばあさんの姿を見て、私はうれしさが倍増しました。

喜びいっぱい、私は教会に戻り、こんなにうれしい事があったことを神様に伝えずにはいられませんでした。ありがとうございますとお礼

の心があふれました。

神様は、何気ない多度津の日常の中に、こんな素敵なうれしい出会いを私に下さいました。

《ピックアップ》テーマ…人を責める
「人を責める心」

大阪府・天満教会 森田光昭

(平成8年12月4日放送より)

少し以前の事ですが、私は、娘が通う幼稚園のPTAの会長をさせていただいたことがありました。周りのいろんな方からの熱心な働きかけがあり、これは神様が私にさせてもらいなさいとおっしゃっているように思えましたので、意を決して引き受けました。

入園式を無事終えて、私も会長一年生として子どもたちと共に第一歩を踏み出しました。

幼稚園は子どもたちの夢で一杯です。素直で明るくほがらかな子どもたちの笑顔を見ている

と、自分の心も自然と和んできます。

夏休みを目の前に控えたある日の事でした。園児のA君が友達のB君と、遊んでふざけ合っているうちに倒れ、A君の顔のほおが2センチほど切れたのでした。すぐに近くの病院で処置をしてもらいましたが、その時、保護者への連絡が遅くなった事と、ほおに傷が残ってしまった事が原因となって、後で大問題に発展してしまいました。けがをしたA君のご両親が、園側に責任を取ってもらいたいというのです。私は園長先生と二人で謝罪をしに行くことになりました。

夜、訪れますと、かわいい子ども顔についた傷が、将来マイナスになるかも知れないと、担任の先生と園の対応のまずさを責め立て、さ

らに、けがをさせたB君のご両親に謝る誠意が感じられないと憤慨するのです。結局、傷が治るまで治療費を園が持ち、B君のご両親から謝罪をしてもらいたいという要望を受けることになりました。

園長先生は誠意を込めて対応されていましたが、さらに厄介な問題が持ち上がりました。

B君のご両親が、うちの子どもがけがをさせた証拠はない、A君が自分で倒れてけがをしたのではないかと主張するのです。事実、その時の現場を担当の先生が見ていたわけではなく、けがをした子どもの言葉を信用しての話なのです。こうなったらお互いが譲ろうとはしません。結局、間に立つことになった私は、両者の言い分を聞くにつけて、一体どうしたら良いのかほ

とほと困ってしまいました。

途方に暮れた私は、しまいには、両者の意地の張り合いを腹立たしく思い、かえって私自身が両者を責める気持ちで一杯になっていました。しかしそんな時、会長をお受けした時のことが思い出され、これは神様が私に与えてくださった役割なのだから、自分の力でしようと思わず、神様が解決してくださるのだという事を忘れてはいけない、また、私自身が人を悪く思い、責める心を持つてはいけないと、心を良いほうへ切り替えることに努めました。

しばらく膠着^{こうちやく}状態が続きましたが、12月のある日、A君のお父さんから連絡があり、一体どうなっているのか、早く何とかしてもらいたいと催促がありました。その時、私は神様に、

「どうぞ、この両者が本心から話し合い、お互いに納得できるようにお計らいください」とお願いをして、A君のお父さんに、「このままでどちらでも平行線で解決する見通しはありません。よかつたら自分の思っている事を、お互いに全て話し合ってみたらいかがですか」とはっきり言いました。

すると、意外にも素直にに応じてくださったのです。B君のお父さんにもご理解を頂き、いよいよ両者が会うことになりました。

その日から、私は毎日神様に、「どうか、このたびの話し合いで、お互いが理解し合えますように」と一心に願い続けました。

私の家に両者のご夫婦が集まったのは、年の瀬も押し迫った日の夜でした。お互いに自分の

子どもを弁護するため、事実関係を再確認し、それは勘違いだ、いや間違いない、などと言い争い、しまいにお互い口もきかぬ気まずいムードが漂いました。すると、突然B君のお父さんが、深々と頭を下げて謝ったのです。

たとえ間接的ではあっても、自分の子どもが関わっていたのは確かだと思われたのでしょうか、B君のお父さんから折れてくださったのです。

しかし、A君のお父さんは追い討ちをかけるようにまだ責めようとします。私は、思わず、「こんなに謝っておられるのですから、あなたも人を責めるばかりでなく、もっと広い心になられたらどうですか」と、たしなめるように言いました。

ムツとした表情で、しばらく宙をにらんでいたA君のお父さんは、思い直したように、「よく分かりました。それだけ謝っていただけなら、もう結構です」と笑顔で答えてくださいました。

一転して、和やかなムードに変わり、しまいには、うちの息子は元氣すぎまして、と互いに笑いながら話し合いました。帰りはお互いに握手をして無事和解することができました。B君のお父さんが素直に謝る気持ちになってくださったことが解決への糸口となった訳ですが、私は、神様がそのようにしてくださいただとお礼を申さずにはおれませんでした。

後日、両方のお父さんから、大変ご迷惑をおかけしましたと、おわびとお礼の電話があり、園長先生も大変喜んでくださいました。

お互いに、自分の立場を主張し、意地になって相手を責めてばかりいても、物事は解決するはずがありません。どちらか一方がよ良い心になり、素直に謝れば、相手もまた素直な良い心になれるのです。人を責める心からは、同じ責める心しか生まれてきません。

金光教の教祖様は、「人に悪く言われても、決して悪い心を持つてはいけない。良い心を持つようにせよ」と、生涯をとおして言い続けられました。

私は今でも、その貴重な体験を思い出しては、自分もまた人を責める心を持たぬよう、良い心になるよう努力しています。



《ピックアップ》テーマ…人を責める

「戦闘は回避された」

大阪府・扇町教会 おうきまち 押木廣太 おしきひろた

(昭和56年12月2日放送より)

「行つてらっしゃい」といつものように妻が教会の玄関の外まで見送ってくれました。金光の教師である私は、その時、玄関先にゴミが落ちてるのが目に付き、「掃除しといてや」と言い残して、出かけたのでした。

夕方、用事を済ませて帰ってみますと、玄関先に出かけた時と同じゴミが落ちています。私はムカツとしました。玄関の戸を開けると、台所から、「おかえりなさい」と妻の声がしました。夕食の準備をしているのです。いつ

もでしたら、「ただいま」と応えるのですが、その時は無言のまま、ダツダツと台所へ入つて行き、「玄関掃除しとき、言うたやろ」とどなりつけたのです。妻は、ちようどキャベツをきざんでいました。その包丁の動きが、にわかにはトントンと早くなり、「私も忙しいのです」と反発してきたのです。

私は頭にカツと血が上り、「外を掃除するのに、何時間かかるねん！」と、どなろうとしたのですが、かろうじて押さえ、台所を出て神様の前に座り込みました。腹立ち虫がグングン頭をもたげてきて、カツカカツかしてきます。そして、心に浮かんでくるのは、妻への不足ばかりです。以前もあんなことがあった。こんなこともある。この間もそうであったと、ますます

腹立ちがエスカレーターしてきます。どうも収まりそうにもありません。一人、カッカカッカしている最中に、どういうわけか、ふと、神様をお祀りしてある御神殿のほうに目が行ったのです。すると、腹を立てている私を、御神殿がじつと見つめているのです。その前に座り、カッカカッカしている私を、無言のまま見つめているのです。私は急に、恥ずかしくなりました。「何を一人カッカカッカしてるんや」と言われているような感じがしたのです。

すると、今までの腹立ちが不思議に収まり、「私はいつたい、何に腹を立てていたんだろう？」と、自分を見つめる余裕が出来てきたのです。そうして考えてみますと、最初は玄関にゴミが落ちていたのです。それが問題だったの

です。ところが私が腹を立てているのは、どうも、その問題から、とんでもない方向へ問題がすり替わってしまったのです。私が腹を立てているのは、「家内が主人である私の言うことを聞かない」ということで、家内を責め倒していたのです。

そう気づかせてもらうと、本来の問題であるゴミは、私にも掃除ができるはずです。妻は忙しく夕食の準備をしているのですから、私がやればいいのです。そう思うと、神様にペコリと頭を下げて、玄関の掃除にかかりました。

掃除をしつつ、このことに気づかせていただいたことをお礼申しながら、ふと次のようなことを想像しました。妻が「私も忙しいのです」と言った時、もし私が「外を掃除するのに何時

間かかるねん」と返していたらどうなっていたでしょう。おそらく妻は「あんたは私を責める事ばかり考えている。自分で気が付いたら、自分でしてください」と返ってきた、それに対して私は「わしが言うてんのは、ゴミのことと違わねん。そもそもお前は、教会を何と見てんねん。

教会の玄関先にゴミが落ちていても平気か！

そんなことで、教会の奥さん務まると思ってるのか。その根性があかんと言ってるねん！ お前は教会の奥さん失格や！」と、ここまでくるでしょう。すると妻は泣き出し、夕食の準備どころではなく、小さなゴミの問題から、相手の欠点を並べ立て、責め合い、最終的には憎しみ合いにまでエスカレートするところでした。初めは鉄砲の撃ち合いから、機関銃になり、大砲

と進み、終わりには、爆弾まで落としかねないのです。

よくこそ、戦闘にならなかったことだと思おうと同時に、どうして、このようなことになっていくのだろうか、考えずにはおれません。よく考えてみますと、それは常に、自分中心でしか物事を見れない私であり、気に入らねば、すぐに相手を責めるものが、私の心の中にあると同時に、妻を私の所有物のように思い込んでいるからであることに、気付かせていただきました。すると、所有しているのは、どうも妻だけではないに、子どもたちも所有しているようです。子どもを叱っている時に、本当に子どものことを思って叱っていることはほとんどないようです。確かに初めは、子どもに注意しているので

すが、「親の言うことを聞かない」と言っ
て、腹を立てているほうが多いのです。

玄関が気持ちよく掃除ができ、おいしい夕
食を頂くことができました。食事を頂きつ
つ、思わされたことは、全ての人間は「所
有されたくない、隷属されたくない」とい
う心があり、それは、天地の神様から与
えられた独立した生命であるからでしょ
う。天地の間に独立した一人ひとりが愛
を基盤として家庭を築き、社会での役割
を共同していつているということです。

それからは、朝起きますと、妻や子ども
たちに、「おはよう。今日も元気で頑張ら
せてもらおう」と私のほうからあいさつ
をし、夜、休ませていただく時には、「今日
もご苦労さん」と

あいさつする毎日となりました。

しかし油断をしますと、つい、「わしが」と
いうものが出て、妻や子どもたちを所有
してしまふことになり、まったく油断が
なりません。これこそ、一生の修行であ
らうと思います。

《もう一度聞きたいあの話》

「伯母のお供え物」

兵庫県・出石教会 いすし 大林 誠 おおばやし まこと

(平成24年1月18日放送より)

都会で一人暮らしをしていた伯母がアルツハイマー病になって、実家であるわが家に帰ってきたのは、今からちょうど10年前のことでした。私が幼い頃、伯母はわが家で一緒に暮らしていて、私のことをわが子のようにかわいがってくれていました。ですから私にとって伯母は、もう1人の母親のような親しい存在です。妻も伯母が大好きでしたので、同居することに全く異存はありませんでした。

しかし月日が経つにつれて、伯母の認知症は、

ゆっくりと、しかし着実に進んでいきました。1年ほど経った頃の伯母は、一日中、「まんじゅうが食べたい」と言い続け、ちよつと目を離すと、財布も持たずに一直線に近所のスーパーに向かいました。

「おまんじゅうちょうだい！」

店に入るなり、レジの店員さんに叫ぶのです。

まんじゅうを買いに行くこと自体は、店の人に事情を説明しておけば済むことです。しかし問題は、伯母が道の真ん中をずんずん突き進んでいくことでした。正面から車が迫ってきて、なぜか全く目に入らない様子です。交通事故に遭わないように、夫婦のどちらかがいつもピツタリ付き添っていないければなりません。心身共に疲れがたまっていきました。

そんなある日のことでした。私が仕事から家に帰った途端、妻が深刻な面持ちで、「今日は、ほんとにヒヤツとしたわ」と、日中の出来事を話してくれました。

わが家の筋向かいに金光教の教会があり、私も妻も毎日お参りしています。妻はその日の午後、伯母が昼寝をしている間を見計らって、家に鍵を掛け、急いでお参りに行ったのだそうです。

ちょうど、年に一度のお祭りの前日に当たっていて、大勢の人が忙しそうに準備をしています。神様に拝礼した後、妻は教会の先生に、事前の準備に加われないことをお詫びしたり、伯母の様子を話したりしていました。その時、すぐ後ろに人の気配を感じました。振り返ると、

なんとそこに、家にいるはずの伯母が立っていたのです。おそらく朝食の時、私と妻が、「明日は教会のお祭りだね」と話していたのが、伯母の記憶の片隅に残っていたのでしょうか。

教会に来た伯母は、トイレットペーパーを一巻き、大事そうに抱えていたそうです。そしてなぜか、その穴のところに、筒型に丸めた新聞広告の紙が差し込まれていました。

「先生、これ、神様にお供えしてください」
伯母はそう言って、恭しくその謎の物体を教会の先生に差し出しました。先生はニコニコしながら、「はいはい、お供えさせていただきますよう」と言って、受け取ってくださいったというのでした。

「それにしても、スーパーのほうへ行ってい

たら、危ないところだったね」と、私たちはそんな話をしながら、伯母の無事を喜んだのでした。

翌日の日曜日は、伯母がデイサービスで老人ホームに出掛ける日でした。伯母を送り出した後、私たち夫婦は早速教会のお祭りに参拝しました。

教会のお祭りは、雅楽に似た厳かな音楽に合わせて、装束姿の先生方が静々と出てこられるところから始まります。しばらくすると、お供え物として、鏡餅やお神酒のほか、海の幸、山の幸を色とりどりに盛り付けた三宝を、人から人へ手渡ししながら、次々に祭壇に運んでいく行事がありました。

その美しさに見とれていると、それらの中に

一つだけ、とても地味なお供え物があるのに気づきました。白い円筒形の物に何やら細かい物が刺さっています。紛れもなくそれは、昨日伯母が持つて来たという、あのトイレットペーパーだったのです。

まさか本当にお供えされるとは……。教会の先生は、認知症の伯母が差し出したトイレットペーパーを、神様へのお供えとして、真心込めて扱ってくださいだったのでした。

お祭りの後、私たちが教会の先生のところへ行ってお礼を申し上げると、「あのトイレットペーパーや広告の紙は、伯母さんには何に見えていたんでしょうかね。でもね、伯母さんにとっては、大事な大事なものだっただに違いない。これを神様にお供えしてもらいたいという、た

だその一心で、ここまで抱えてこられたんです。神様はね、人間のそういう一途な思いを、何よりも喜んで受け止めてくださるんですよ。伯母さんは、昔から神様を本当に大切にしてくれました。今もそれが、伯母さんのいのちに刻み込まれているんですね。何と尊いことではないですか」

教会の先生は、時折声を詰まらせながら、こう話してくださり、私たちも胸に熱いものが見上げてくるのでした。

その時、私は気づかされたのです。お供え物の値打ちが、値段や見かけで決まるのではないのと同じように、人間の値打ちも、役に立つとか立たないとか、見栄えが良いとか悪いとか、そんなことで簡単に測れるものではないのだ

と。そして私たちを慈しんでくれた伯母を、どこまでも大切にしていこうと、心に誓ったのでした。

あれから随分時が経ちました。伯母は今、全く言葉が出なくなり、歩くこともできなくなつて、椅子に座つて静かに毎日を過ごしています。そんな伯母に、まるで天地に溶け込んでいくような、清々^{すがすが}しさと神々^{すがすが}しさを感じるこの頃です。

《こころの散歩道》

「自分も他人も知らない自分」

なぜか小さい頃に聞いた話をいつまでも忘れずに覚えていることがある。人間は忘れる生き物であるから、たくさんのことを忘れながら生きていくのに、その話だけは、削除できないファイルのように心にしまわれて、いつでも呼び出し可能なのだ。

私が中学校1年生の時だから、もう40年も前になる。担任の先生は、男の体育の先生だった。先生は、怖くて厳しそうな見かけによらず、にこやかで温和な人だった。長距離走が苦手だった私にも、体育の授業でのタイムが、走るたび

にわずかながらも良くなっていったことを一緒に喜んでもくれた。随分と遅いタイムだったのに。

その先生が、ある日のホームルームで、黒板に正方形を書き、それを田んぼの田のような形に4分割しながら教えてくれた。「人間には、自分も他人も知っている部分、自分は知っているけれど他人は知らない部分、自分は知らないけれど他人は知っている部分、自分も他人も知らない部分があるんだ」。

先生が何を言おうとして話されたのかは全く覚えていない。しかし、その内容だけは記憶に残った。自分も他人も知らない部分があることに神秘的なものを感じたのかもしれない。

私はその後すぐに転校した。会社に勤めるよ

うになつてから、その先生に一度だけ再会したことがある。私の職場近くの喫茶店で、その先生がいることに気付いた私は、「先生！ 中学1年の時、担任してもらつた者です」と自分の名を名乗つた。先生は、「あー、元氣かー！」とすぐに気づいてくれて、すっかり社会人になつた私を見て、当時と同じ笑顔で喜んでくれた。そして、これからの私にエールをくれた。

その姿に接しながら、4分割の話を思い出した私は、先生がなぜ私たちにその話をしてくれたのか分かつたような気がした。「これからいろいろつらいことや苦しいこともあるだろうけど、いろんなことに挑戦して知らない自分をどんどん発見して、前向きに生きてくれ」。そう言いたかつたのだ。

*

それからの私が前向きに生きたのかと問われると、決してそんなことはない。元来、悲観的な人間である。後ろ向きな生き方は変わらなかつた。しかしこんなことがあつた。

付き合ひが続いていた高校時代の友人からある日、食事に誘われた。前々から仕事のことでも悩んでいるのは聞いていた。友人はその日、深刻な表情で、「今の仕事を辞めて、新しい仕事を探そうかと思う。でも新しい環境でまた一からやり直すのはしんどい」と低い声でつぶやいた。

このような悩みは、実はすでに本人の中で答えが出ていて、あとは背中を押してもらいたいだけのことが多い。私はじっくりと話を聞くう

ちに、この場合もそうだと判断した。私自身、

出した。

全くなじみのない職場に異動になった経験を話しながら、自分の性格を棚に上げ、あの4分割の話を持ち出したのだ。「人間には…云々^{うんぬん}。だから、新しい自分を発見するチャンスだよ」と。そのあともいろいろ話したと思うのだが、お酒が記憶を消してしまった。

聞いてみると、人見知りで愛想もない自分だ
と思い、人からもそう見られていると思ひ込
でいたけど、職場で積極的にあいさつしたり、
話しかけたりしているうちに、意外と人付き合
いが楽しいものだと思えるようになったのだと
いう。

しばらくしてその友人から、会社を辞め、新しい会社で働くことに決まったと連絡があった。落ち着いてから会った時には、言葉の調子も顔色も見違えるようだった。「あんなに不安だったのに、新しい職場にすっかりなじんでしまっ…」というようなことを上機嫌で話してくれた。その時、「自分も他人も知らない部分であるんだなあ」と前に話した私の言葉が飛び

その彼は、現在伴侶にも恵まれ、2人の子ど
もの親として、毎年、幸せそうな家族写真の年
賀状を今でも送ってくれる。

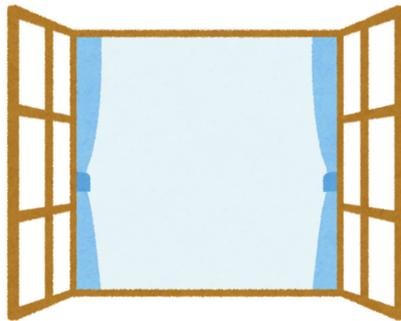
*

年齢を重ねてから調べて分かったのだが、4
分割のお話は心理学のモデルとして使われてい
るものであった。「自分も他人も知らない部分」
は、未だ^{いま}に知らないという意味で「未知の窓」

と呼ぶようである。新しいことに挑戦する中で
気が付くことがあるそうだ。

今でも後ろ向きな性格は変わらない私だが、
金光教の教師になった今は、新しい自分を発見
できるようにと願えるようになった。

「自分も他人も知らない部分」とは神様だけ
が知っている部分だ、きつとそうだ。神様のほ
うがそこに気づいてくれとずっと私たちに願っ
てくださっているのだ。そう思っている新しい
自分を喜んであげたい、と思う。



「我が家に、はるが来た！」

私は一人娘で兄弟姉妹がいませんが、両親から、たっぷりの愛情をもらって育ちました。

母はいつも、自分のこと以上に私を心配してくれました。そして母は父を頼りにし、私も父のことを尊敬していました。

父は決して多くを語るような人ではありませんでしたが、その背中で歩むべき道を教えてくれるような人でした。私はそんな父を慕い続け、父に喜んでもらうことが、私の喜びになりました。もし父がいなくなったら私はやっていけないのだろうか、よく思ったものです。

しかし、平成30年に両親は亡くなりました。

父が10月、母が11月と、続きました。父のお葬式をしたばかりで、母まで見送るとは…。私は胸が締め付けられそうでした。

*

両親が他界して、およそ半年後。平成から令和に変わってすぐの出来事です。

夫と一緒に、私の実家に行きましたが、どこからかニャーニャーと子猫の鳴き声があります。

近付いていくと、実家の天井裏に子猫が一匹、置き去りにされていました。「これは困った！」

このままでは死んでしまう」と思い、出してあげようと手を伸ばすのですが、天井裏の隙間が狭くて手が入りません。仕方なく、天井の一部を切り取って、子猫を助け出しました。

何と、片手に乗るくらいの、小さい小さい赤ちゃん猫でした。目も開いていませんし、まだ生まれて間がない感じです。猫を飼ったことのない私たちは、どうして良いのか分からず、とりあえずミルクを買いに行きました。ミルクをスポイトで吸って、少しずつ飲ませてあげようとしたのですが、子猫はあまり欲しがらず、ただ鳴くばかりでした。お母さんを呼んでいるのかなと思いましたが、母猫が迎えに来る気配はありません。

知人に、猫が欲しい人がいないか尋ねましたが、ダメでした。猫を入れている段ボールに張り紙をして、外に置くことも考えたのですが、やはり心配でやめました。そうしてお世話をしているうちに、だんだん情が湧いてきました。

このまま家で飼おうと決めた矢先のこと、子猫は風邪を引いた後、あっけなく死んでしまいました。獣医さんの話によると、母猫に置いていかれたという時点で、体が弱い子だったみたいです。保護してわずか9日目の出来事でした。

あまりにも短い命でしたが、私の中ではその子の存在が大きくなっていました。生まれただけでまだ開いていなかった目が、ようやく開きそうだったので、そのかわいい目を見れなかったのも残念でした。

片手に乗るくらいの小さい小さい赤ちゃん猫。私は自宅の庭に埋めてあげました。涙が止まりませんでした。「お世話をちゃんとしてあげられなくてごめん。でも私は幸せな時間だったよ」と言うと、ニャーニャーと2回、この子

の声が聞こえた気がしました。閉じた目はとても穏やかで、かわいく見えました。

お別れをしてから、心にポツカリと穴が空きました。

両親を亡くした後の出来事だったので、余計に悲しく感じました。

*

私はショックで力が抜け、自然と、近くのペットショップに足が向きました。動物を見るだけで癒やされました。インターネットで、里親を募集している多くの保護猫も見ました。しかし、保護猫に会いにも行つたのですが、残念ながら条件が合いませんでした。そんな中、たまに訪れたペットショップで、1匹の子猫が私にとっても懐いてきました。アメリカンショート

ヘアという種類の子猫でした。その子に縁を感じて、家族になることを決めました。

生後4カ月の元気な男の子で、名前は、「ハル」と付けました。令和の令と書いて、ハルと読みます。よく食べ、よく遊んで、今は2歳4カ月になりました。

*

私は、いまだに両親の夢をよく見たり、ふとした時に思い出して寂しくなるのですが、ハルのお世話をしていると、その寂しさがスッと消えます。まるで、私のことを心配した両親が、代わりに連れてきてくれたかのように思いました。

後で聞いた話ですが、実は母も昔、猫を飼っていたそうで、その猫の名前も、ハルだったよ

うです。そもそも、亡くなった子猫ちゃんと出会った場所は実家だったので、縁はそこから始まっています。あの猫ちゃんの方まで、ハルのことを大事にしたいです。

ハルは普段は活発ですが、私が部屋で仕事をしている時は邪魔をせず、私の座っている足元で丸くなり、おとなしくしています。何だか、寄り添ってもらっているような気持ちになります。マツタリとした空気にも癒やされます。以前の私なら、猫を飼うなんて思いもしませんでした。ですが、今では毎日、「ハル、わが家によろ来てくれたね！　ありがとうね」と言っています。

「お父さんお母さん、毎日いろいろなことがあるけれど、頑張ってやっているよ。これからも見守っていてね」



「お世話になります」

妻の実家に帰省していたある日のことでした。外からダツダツダツと大きな音がしてきました。窓からのぞいてみると、コンバインが稲刈りをしています。働く車が大好きな小学2年生の長男が外へ飛び出していきました。お隣の田んぼが稲刈りを始めたのです。

それまで稲刈りを見たことのなかった私は、「まだ秋も深くないこんな時期に稲刈りをするんだな。稲はもう色付いていたのかな」とぼんやり想像を巡らせていました。

一方息子は、目を輝かせてその様子を眺めて

いました。ひとしきり見学して帰ってくると、何かを思い付いたように私に話し出してくれました。「そういえば、教科書にお米の出来るまでが載っていたよ」。「じゃあ、明日、家に戻ったら教科書を見てみよう」。

翌日、家に戻った息子は、早速教科書を広げ、苗作りからコンバインを使って刈り取るまで、さらには白米になるまでの米作りの大変さを私に教えてくれました。そして、「いっつもおいしくお腹いっぱい食べているご飯がこんなふうに出てくるなんて知らなかった。感謝しなくっちゃね」とうれしそうにほほ笑んでいました。その笑顔に、いつも食べているご飯に、こんなにも多くの人が関わっているんだと知った驚きと、そこに湧き上がってきた息子の純粋な感謝

の気持ちを見るのでした。

*

ある方がこんな話をしてくれました。

「私は、長年、ボランティアで炊き出しに参加してきました。月に1回、ボランティア仲間でおにぎりや豚汁などの汁物を作り、配るんです。最初は、私自身料理もあまりできないし、量も多いので、大変だなという思いがずっとありました。でも、参加を重ね、慣れてきたこともあるのでしょうか。やりがいを感じてきました。もちろん、集まっている皆さんのこれまでのことも知らないし、これからのことを祈らずにはいられないけれど、料理を手渡している今、この時、少しでも皆さんの役に立てていたらいいなと思いました。それからは、ずっとそのよ

うに思っていたんですが、最近気づいたんです。私は人助けをしているんだと思ってきましたし、そのことにやりがいも感じていました。でも、違ったんです。炊き出しをしても、受け取ってもらえなければ渡せない。料理を振る舞うにも、食べてもらえなければどうしようもないと気づいたので。その時から、受け取ってくれてありがとうと思えてくるようになりました」。

このようなお話を聞かせてもらいました。

私は、「支える人が実は支えられていた」「助ける人が助けられていた」。そんなこともあるんだ、と思わされたのでした。

*

3年間の介護生活を経てお母さんを看取った

一人息子さんのお話です。

その方は、「介護の最中は体力的につらい。睡眠が満足に取れない。仕事との両立が難しい」とおっしゃっていました。しかし、そんな生活が続いていく中、ある時、「介護できるといのは、親孝行のチャンスをもたらしているのだな」とだんだん感じるようになってきたんです」と教えてくれました。「介護と仕事の生活は、大変なことが多いには違いないけれど、母との時間の過ごし方を大切に思えるように今はなっているんです」ということでした。立派な方だなあと思いました。

そして、介護の日々が終わりました。いろいろと振り返ったのでしょうか。数カ月した後、こんなことをおっしゃいました。

「介護できることを親孝行のチャンスと思えたことを、我ながらよくそう思えたなど多少は自負していたところもあるんです。でもね、よく振り返ると、私が思えたというより、そう思わせてくれるような母だったんですね。ほんとにありがたい親をもって幸せ者だったんですよね」。

そうしみじみと話してくれました。

*

今日紹介したお話は、どれも当然のように思っていた物事の背景がふいに見えたことがきっかけとなった、心からの純粋な感謝の気持ちがありました。

そして、こんな気づきと一緒にあるように感じます。それは、支え、支えられている、支え

合いの中に生きていくこと。当然ではありながら、とても大切なことが見えなくなっていたなという、そんな思いです。

それぞれの素直で純粹な感謝の気持ちに触れ、私ももうちよつと丁寧な生活を心がけて、日常の中に潜んでいる大切なことを見過ごしてしまわないように、そして、生活の中に見つけた大切なことへの感謝の心を育てていきたいと思うのでした。



《こころの散歩道》

「肉そば」

皆さんは、注文した料理と違った物が運ばれてきた経験はありませんか？

先日、同僚と2人でお昼ごはんを食べに行つた時の事です。その日は軽く済ませようと、うどんとそばが売りのお店に入りました。

そのお店は2階建てで、1階は既に満席状態。お店の方に促され、2階へ上がると、店員さんから、「こちらの方と相席でお願いします」と案内されました。見ると男女のカップルが既に座っていて、仕方なく会釈をしてそこに座りました。

同僚と2人でお品書きを見て、私は750円の肉うどんを注文しました。前のカップルの会話を聞いては悪いと思い、2人で話が途切れないように気に掛けながら料理が来るのを待っている。と、同僚に料理が運ばれてきました。なぜか私の注文した肉うどんはまだ来ません。しばらくして、やっと運ばれてきました。来た来たと思つて目の前に置かれた丼は、うどんではないように思いました。「あれ？ そば？」と思つたのですが、確認のためにもう一度、目をパチパチさせてよく見ても、やはりそばです。でも、もしかしたらゆでる時に混ざつて、上の表面だけそばが入ったのかもしれないと思い、今度は割り箸を使って中をそつと見てみました。やはりそばです。

間違つて運ばれてきたんだと思つて、店員さんがいないか辺りをキョロキョロと探したのですが、いません。下まで言いに行こうかどうかどうしようかと迷っているうちに、「神様、どうさせてもらつたら良いでしょうか」と、無意識に神様にお伺いしている自分がいました。そして、肉そばに目が行き、「もし間違つて作ったのだとしたら、この肉そばは誰が食べるのか。後で店員さんがまかないで食べるのか。それとも捨てられるのか。それとも他のお客さんに回される？

いや、そんなことはないか」と心の中であれこれ考え、いずれにせよ、捨てられるのはもつたいたいと思ひ、食べることにしました。

*

3分の1ほど食べた頃、店員さんが血相を変

えて飛んできて、「お客さん、うどんだったね。すみません。申し訳なかつたです」と、こちらが気の毒に思うくらい何度も謝つてくれました。私は、「いいですよ。大丈夫です」と店員さんを氣遣つて、そのまま肉そばを頂きました。そうしてそばを食べているうちに、私はだんだんとそばの値段が気になってきました。そばの値段は、うどんより100円高い85円です。向こうが間違つたのだから、少なくともうどんの代金と一緒にだよねとか、もしかしたらお詫びに50円引いてくれるかもと胸算用していました。食べ終わつて、さて会計へと進んでいくと、レジにいた店員さんも、「うどんとそばを間違えてすみませんでした」と謝つてくれました。「じゃあ、お会計は850円です」。「え、肉うどんは750

円じゃないの？」と思いながら伝票を見ると、うどんの「う」に×がしてあり、そばの「そ」を○で囲っています。仕方なく850円払ったのですが、どうも納得がいかず、「あの一、750円じゃないんですか」と尋ねると、店員さんは「そばは100円高いんです」と言います。「えっ、そっちが間違ったのに」と、喉まで出かけましたが、「ここでけんかはしたくないな」と思い直し、「そうですか」とだけ言って、お店を出ました。

*

不思議と相手に対する怒りの感情は起こりませんでした。ただ、こちらが恐縮するぐらい謝ってもらったにもかかわらず、そばの値段を請求された理不尽さに、心の中がざわざわしてい

ました。「まあ、それでも相手が助かったのだから良かったかな」と思い直し、ざわざわしていた心を収められました。

捨てられてはもつたいないと食べたことで、肉そばが無駄にならず、食べ物に大事にさせていただけたことは良かったと思います。何より、神様が、物を大切にすることを喜んでくださったかなと思うと、今回のことも無駄ではなかったと思います。

*

誰でも思いがけない出来事が起こってきます。

今回のことでも、相手が間違ったのにもかかわらず、店員さんを気遣ってしたことが正規の値段を払うことになるという、思いもよらない

出来事でした。一見、割に合わないと思うかもしれませぬ。でも、相手のミスを責めず、怒りの気持ちが湧かなかつたこと、また、わざわざわした気持ちにはなりましたが、相手が助かつて良かったと思えたことは、神様に心を向けたからこそ働きだつたと思います。もし、あの時、私が神様に心を向けずに怒っていたら、マイナス面ばかりに目が行つて、文句ばかりの心になつていたかもしれませぬ。お金には代えられない心の助かりを頂きました。

もしかしたらその100円も、神様がいつかどこかで帳尻を合わせてくださるかもしれない。そんなふうにも思えます。



金光教本部 ラジオ放送係

住所 〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷320

電話 0865-42-6453

FAX 0865-42-2114

メール w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

朝日放送 日曜日 あさ5時40分

放送センターHP
「ここで聴く
おはなし」



「ここで
聴くおはなし
Podcast」



放送後の音声はWebサイトやPodcastで聴くことができます。